

---

# 空にあこがれて

あかり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空にあこがれて

### 【Nコード】

N3299Q

### 【作者名】

あかり

### 【あらすじ】

空飛ぶ船を生活拠点とする謎多き種族、空賊。

空賊を取り締まるのが、空軍。

空軍の将軍の娘エリッサが主人公。

## プロローグ（前書き）

読みにくい文書だと思いますが、ご意見、ご感想、お待ちしています！

## プロローグ

世界で一番きれいなものを聞かれたなら、エリッサは迷わず“空”と答えるだろう。

子供特有の澄んだ瞳には、虹色に染まる夕暮れの空が映りこんでいた。

くすんだ金髪は、まだあどけない少女の背中で、走る動きに合わせてリズムよく揺れる。

「エリッサ！早く来いよ！」

時々後ろを気にしながらエリッサの前を走る少年も、エリッサと同様まだかなり小さい。

着ているものの違いから、二人の身分が違うことは一目了然だ。

しかし当の本人達はそんな事は露も気にとめていないようだ。まるで兄弟のように、目的地に向かって楽しげに駆けてゆく。

「グレイ、待って！ あっ！！」

エリッサが何かにつまずいて派手に転んでしまった。

シャガード織りの厚手の生地を使ったドレスの右半分が泥で盛大に汚れる。

少年は素早くエリッサに駆け寄り、自分の洋服の袖でエリッサの顔についた泥を拭う。

すりむいた腕と足が痛むのか、エリッサの目にはみるみる涙がたまる。

嗚咽をこらえようとくしゃくしゃな表情になるエリッサの手をグレイは優しくとり、二人は間もなく闇につつまれる街の郊外へと歩きだした。

二人は家々の窓辺のランプからこぼれだした光を頼りに街路を抜け、

郊外へとたどり着く。

すると突然視界がひらけ、若草で覆われたなだらかな丘が視界に広がる。

その丘の丁度てっぺん、闇が忍びよる直前の薄い紫の空の下でもはつきりと見えるものは

「 그레이、空賊の船だわ!!」

エリッサの頬には薄闇でも分かるほど赤味がさし、興奮で眼はきらきらと潤む。

すべてが謎に包まれたその船の看板には、野蛮そうで、暖かそうな光がぼつぽつと灯っている。

「なんて大きいの! あんなに大きいのに空を飛ぶなんて!!」

弾けたようにはしゃぐエリッサの横で、空賊の少年、 그레이は哀愁をおびた眼差しで船を見つめる。

エリッサは 그레이の手をとると、それを合図に二人は一瞬目配せをし、船に向かい全速力で駆けだした。

しかしエリッサが船に辿り着くことはなかった。

丘の中腹に辿り着いたころ。

ドーン

背後から聞こえた大砲の音に、楽しげだったエリッサの顔が凍りつく。

二人は同時に背後を振り返る。

一様の軍服を着た鉄砲体が、まるで蟻が砂糖に群がるような勢いで丘を這い上がってくる。

「パパだわ、パパは空軍の將軍なの」

エリッサの言葉に、 그레이は目を大きく見開く。

二人はそれまでよりも格段に速く、船めがけて丘を駆けのぼる。

しかし訓練された軍兵の俊足にはとうていかなわず、やがて軍兵の魔の手が二人めがけて伸びる。

「やめて！やめてよっ！ 그레이 助けてっ」

「誘拐された將軍のお嬢様を確保したぞ！」

じたばた暴れる事しかできないエリッサと対象に、 그레이 は武術の心得があるようだ。

軍兵ですら見たことのない武術を駆使して激しく抵抗する。

しかし多勢に無勢、隙をつかれて鋭い一撃をかまされる。

「 그레이 ツー！！」

悲鳴のようなエリッサの声をかき消すように空賊の船からも大砲の応戦が始まる。

ドーンといういくつもの地響きの中、エリッサが軍兵にむりやり連れて行かれながら最後に見た物は、丘を埋め尽くす空賊と軍兵の殺気の渦だった。

## 1章、空軍將軍の娘？

カラカラカララン、カラカラカララン

「起床のお時間でございます」

エリッサの朝は、大勢の侍女たちの耳触りな合唱と、彼女達が鳴らす巨大なベルの音で始まる。

十六歳になったエリッサは、まだ子供の頃の面影を残していた。

肩の高さに切りそろえた金髪の頭を、名残惜しそうにピローに埋める。

「お嬢様、起床の時間でございます」

「お嬢様、お起きになつて下さいませ」

侍女たちはエリッサが固く目をつむっているのを完璧に無視して、ベットを整えたり、ドレスを持って来たりする。

侍女の手が伸びてきて、ナイトドレスの細いリボンを解きにかかるのと、エリッサはようやく半身を起し、侍女の手を払いのけた。

侍女の一人に髪をすかれながら、エリッサはベットに立ち上がり、ベットの天蓋から吊るされている深紅のビロードのカーテンを閉めていく。

「でてつて」

事もなさにエリッサがそういうと、侍女たちはすごすごとカーテンの外に退散する。

こうでもしないと、エリッサは一日に何回もある着替えの度に大勢の前で素っ裸にされてしまうのだ。

エリッサはできる限り急いで着替えているつもりなのだが、侍女たちはその遅さにたいていつも業を煮やしてしまう。

「お嬢様！」

そついい侍女の一人がベッドのカーテンを開け放つと、その侍女目がけてエリツサが放ったピローが飛んで来た。

日課の慌ただしい起床を終え、朝食の席に着く頃には、エリツサの顔には薄く化粧が施され、結わえられた髪には紫の小花が飾られている。

憂鬱そうなエリツサの表情も、出来立ての豪華な朝食を前にして、少し明るくなる。

エリツサが白いクロスがかかった巨大なテーブルで朝食に手をつけ始めると、白髪の男が恭しく一礼して、部屋へと入って来る。

エリツサの教育係、アンドルフだ。

「お嬢様おはようございます。アンドルフが本日のご予定をお伝えします」

エリツサはアンドルフに一瞥もくれない。ウインナーやハムをどんどん口に運んで行く。

そんなエリツサを気にもとめず、アンドルフは分厚い羊皮紙を読み上げる。

「7時、貴族の作法についての勉強、

10時、武術の訓練、

2時、貴族の御婦女の方々とのお茶会、

6時、晩餐会への出席、

24時、剣術の訓練、

2時、入浴

3時、就寝

以上でございます」

えびのようにそつて最後の言葉を告げるアンドルフの方を、エリツ



サは初めて見る。

「昼寝と、休憩と、自由時間の予定がないじゃない」

「空軍の将軍のお嬢様であるあなたに、無駄にしてよい時間など一刻もありません」

さらにふんぞり返っていうアンドルフを、腕をくんだエリッサはきつと睨みつける。

「昨日も3時間しか寝てないのよ。あんた私を殺したいの？」

突然のエリッサの言葉の刃に、アンドルフは慌てる。

「な、何をおっしゃいます、将軍様の娘として、これ位は当然ですぞ」

「じゃあ私は今日限りで将軍の娘をやめるわ。こんな窮屈な生活、未練なんてこれっぽっちもないんだから」

「ななな、何をおっしゃいます！！お亡くなりになられたお母様が悲しみますぞ！」

アンドルフは鼻息荒くまくしたてる。

エリッサは死んだ母親が出てくると弱いようだ。

何か言いたそうな顔のまま、ぐつと押し黙る。

暫く二人の間に気まずい沈黙が流れる。

その沈黙を破るかのように、エリッサは椅子から立ち上がり、アンドルフの元へつかつか歩いてゆく。

「いい、明日の予定に昼寝と、休憩と、自由時間と、散歩の予定を入れなかったら、あなたのそのカツラを芋虫の巣にしとくからね」  
強気なエリッサの視線に僅かながら動揺するアンドルフの様子を見て少し気分が晴れたようだ。

侍女を侍らせたエリッサは、訓練場の方へと足早に消えていった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3299q/>

---

空にあこがれて

2011年1月26日02時47分発行